

戦局を有利にした  
警視抜刀隊



二俣口の薩摩に斬り込む警視抜刀隊（画：増田民男）

## 1 なぜ、警視隊は戦闘に加わったのか

### (1) 騒擾の鎮圧は警察本来の任務

川路大管視の「警視庁創設建議書」(明治6年9月)の中に「選卒ノ職、平常ニハ司法地方ノ警察ヲ勤ムト雖モ、止ムフ得サレハ銃器ヲ取りテ兵トナル、因テ各國ノ警保寮ニハ銃器ヲ予備セリ。是レ全ク事アルニ臨ンテ警察ノ權力ヲ以テ鎮静スルヲ要シ、漫リニ兵ヲ動カスヲ恥ルナリ。故ニ地方ノ一揆暴動ニハ警保寮ニ於テ人數ヲ繩立ノ權アルベシ」と述べ国内で発生する騒擾は軍隊ではなく警察力で鎮静させるべきとしている。



警視局長 大管視  
川路利良  
当時42歳(鹿児島)

### (2) 鎮圧のため兵術演習の実施と派遣

明治7年2月10日、警視庁は内務省に対し、内乱や銃砲を持つ大規模な騒乱が発生した場合は、巡査が銃を執り鎮圧に当たると銃器装備の必要性を訴え、同月20日に条件付で許可を受け、同月25日には銃器を携え佐賀の乱の鎮圧に赴いている。その後、陸軍省からエンピール銃7000挺を借り、うち1000挺を操練用にし、陸軍士官を招いて同年8月31日から兵術演習を実施し騒乱に備えた。

明治9年10月に発生した熊本・秋月・萩の乱では、警視隊は銃携行で鎮圧にあたっている。植木口警視隊



警視隊のスナイドル銃(警察博物館)



警部の軍刀(警察博物館)

も薩軍との戦闘に備え銃携行で派遣されている。また剣術については当時の警視官は通常勤務において一等巡査以上は帶剣、二等巡査以下は警杖を所持しており、逮捕にあたっての剣術訓練は兵術演習の中で行われていた。(大正13年6月号「自警」西南戦争に出征した堀次郎の談話)

### (3) 警視局の設置

政府は、鹿児島の蜂起を想定して、訓練の行き届いた警視庁の警視官を全国どこでも迅速に派遣できるように、明治10年1月11日警視庁を廃止し、内務省に警視局を設置して警視庁の警視隊を直轄、東京の治安は

「東京警視本署」があたることとなった。



明治初期の警視局と東京警視本署(警察博物館)

### (4) 徹兵の戦力に対する不安視

当時の徳兵制は、免役適用者が多く、後備兵が不十分で、政府内も戦力不足を不安視し、訓練に手間がかかることから、即戦力となる士族を徴募して警視官に採用した。警視隊は約13000人が戦闘に参加している。

## 2 植木口警視隊は、どのようにしてできたのか

植木口警視隊は、次の三隊が南関で合流して結成される。

### (1) 鹿児島差遣勅使護衛の上田隊

三等大警部 上田良貞（鹿児島：當時 31 歳）率いる約 100 名は権少警視江口高確指揮下の警視隊で明治 10 年 2 月 26 日、東京を出発、横浜から海路大阪に向かい、明治天皇の警衛にあたる。同年 3 月 1 日、鹿児島差遣勅使柳原前光議官一行の護衛を命ぜられ、神戸から船で九州へ向かつた。同月 3 日博多に上陸後、福岡の征討総督本營から南関の熊本飯県庁への出張命令を受け、江口権少警視の指揮から離れ、6 日に南関に入り、翌 7 日から高瀬を拠点に長洲・南関方面の治安警備にあたった。

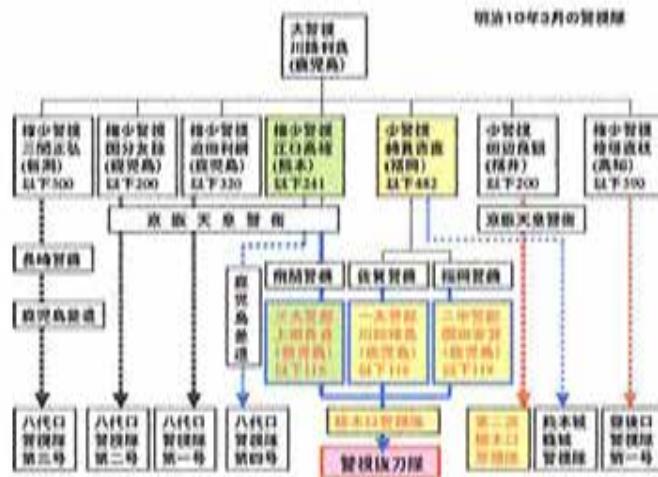
### (2) 佐賀派遣の川畑隊

鹿児島の情勢が緊迫化する中、明治 10 年 2 月 8 日熊本県権令富岡敬明から「県下人心未ダ穏ヤカナラズ、且隣県ノ風聞モ之アリ、方々一時取締ノ為、巡査百名警部引連レ、臨時出張アリタイ」と警視隊派遣の要請が行われた。大久保内務卿は、この要請を受けて川畑大警視に命じ、警視隊を熊本のみならず長崎、佐賀及び福岡へも派遣するよう指示した。九州派遣警視隊は同月 10 日東京を出発、横浜から海路で九州へ向かい、同月 16 日に博多港に到着した。

一等大警部川畑種長以下約 100 名は福岡派遣隊とともに、博多に上陸、18 日佐賀市に到着し元町の小松屋に警視出張所を開設して周辺の警戒警備に当たった。3 月 6 日大警視より「熊本ノ通路開ケシ上、速ヤカニ同所ヘ繰り込み綿貫少警視ノ手ニ合スベシ」の命令を受け、川畑隊は 3 月 7 日、佐賀を出发し、同日南関に到着した。

### (3) 福岡派遣の園田隊

権少警視重信常憲を指揮長とする福岡派遣隊約 100 名は、2 月 16 日に博多に上陸すると、直ちに福岡の警備にあたった。19 日征討令、25 日西郷らの官位剥奪で、重信権少警視は西郷に敵対できないと警視局に帰京願いを出し、これが了承され、3 月 4 日付けで二等中警部園田安賢が福岡派遣隊の指揮長に任命された。同月 6 日前記川畑隊同様に大警視の命令により、園田隊も警備を終え、熊本へ向



け出発、同月8日に南関に到着した。

### 3 警視抜刀隊のきっかけは

#### (1) 薩軍の抜刀攻撃に政府軍苦戦

##### ア 抜刀攻撃の威力を証明した五番大隊五番小隊長 菅田武一

田原坂の戦闘は、3月4日から始まるが、同月5日、雨の中、田原坂本道上では激戦が展開された。午前8時頃、ここで戦っていた石橋清八（五番大隊八番小隊長 31歳）隊は、味方の死傷者が増え、政府軍に突破されそうな状況になっていた。石橋隊の状況を前日山鹿から到着して、本道右側の二俣口で交戦中の菅田武一（五番大隊五番小隊長）が知った。菅田は直ちに、隊員のうち半数の約100名を、副隊長黒田次郎左衛門の指揮で石橋隊の応援にあたるように命じた。菅田は救援に向かう部下を集め「銃はここに置いて行け、刀だけを使え、直ちに現場に向かい、先頭にたって戦え」と力強い声で命じた。日本刀だけを持った100名は、苦戦中の石橋隊の先頭に割って入り、一齊に政府軍に襲い掛かった。政府軍は狭い道で、坂上から見下ろすような位置から日本刀を振り回され、坂を4~500メートル押し戻され、前日奪取した薩軍が使っていた堡壘に入つて防戦に努めた。田原坂本道の戦いは午後4時まで続き、薩軍側の資料では「この日政府軍側は多くの死傷者を出し、この地域の麦畑は流血で赤く染まつた」と記録している。菅田は前日到着し、二俣口で政府軍と戦い、すぐにここでは銃より、日本刀を使って攻撃する戦法の方に効果があることを直感していた。

##### イ 弾薬不足と短兵戦法の増加

弾薬不足もあり、日本刀による攻撃が効果があがることを知った薩軍は、150名位で一つの集団を作つて攻めるようになり、平民からなる政府軍は薩軍の短兵戦法を怖れるようになった。

#### (2) 川村參軍の「斬り込み戦法」の戯言（3月8日二俣出張本營）

川村參軍は海軍兵力の配置が終わり、連日激戦が展開される田原坂の戦況を自ら確認する目的で3月7日福岡を出発し、翌8日早朝から二俣出張本營付近から視察にあたつた。戦況を見ながら上田警部らのそばで「あの小さな壘を攻めるのに、これまで幾日かかったとか、どれほど多くの軍人を失つたとか、大変な犠牲を費やしてしまつた。今、志ある者百余人在募り、決死の覚悟で左右から一齊に突進、斬りこませたなら、あの壘を必ずや粉砕することができるだろうに、これまでに費やした多くの犠牲にかわり、百余人在決死の覚悟をもつて、この期待に応え、戦闘に赴くことを希望する者はいないものか」と独り言を發する。

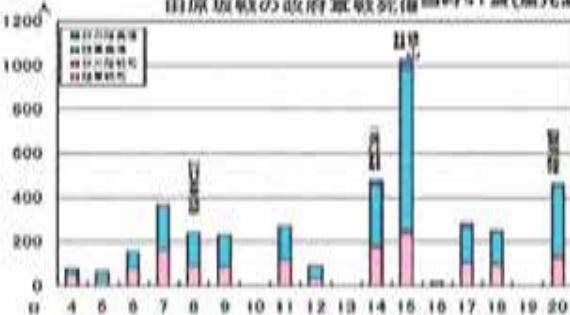
#### (3) 上田警部「警視隊による田原坂斬り込み」を決意（3月8日二俣出張本營）

##### ア 戦況視察までの経緯

上田警部及び隊員は、鹿児島差遣勤使護衛で鹿児島において戦闘に従事できると考えていただけに後方勤務の南関派遣は不満であった。上田は江口権少警視に「我々は命を鹿児島に奉じ



參軍 海軍中尉  
川村長輔  
當時41歳(鹿児島)



てきた。然るに南閥出張は遺憾に堪えない。やむなく派遣するなら一個小隊を抽選で決められたい」と申し立てたが許されなかった。また出張先でも熊本県権令心得（内務権大書記官）石井省一郎に対して出戦を願いでたが諭され、願いはかなわなかった。上田は、この地城の警備にあたるため、陸軍の要衝であり、征討軍の前線拠点がある高瀬に7日警視隊の拠点を置き、翌8日に攻防が続いている田原坂の戦場を視察したのである。

#### イ 川村参軍の意を解釈

川村参軍は、「政府軍が銃弾で薩軍を制圧し、敵の壘に接近すると、刀を持った集団が現れ斬り込んで来る。刀での攻撃に応戦できない政府軍は総崩れとなつて元の場所まで撤退することになる。この繰り返しが続いている。旧士族で編成されている警視隊が、刀を持って最前線で敵と斬り合いをやり、政府軍の前進を容易にしてやればよいのではないか」ということを我々に伝えたかったのではないか。

#### ウ 戦闘参加を決意

上田警部は限元實道警部補（当時27歳：鹿児島）に「男子たる者が、名誉あることを為し、その名を歴史に残す機会は、この時しかない。私は川村参軍が申されたとおり、この戦場で血を流すことを怖れず奮戦し、敵の指揮官を斬り熊本城にたてこもっている味方の者たちを救い出すことができたら、なんと喜ばしいことではないかと思う。君は急いで南閥に帰り、川村参軍が語られたことを川畠警部に報告し、警視隊員の諸君にも説明し、戦場に出て早く敵を倒す決意を固めさせよ」と決意を語る。（征西戦記稿）



□警視隊巡査の正帽

#### (4) 川畠警部の決意

##### ア 隊員の出戦要請

2月20日川畠隊が佐賀市内で警備にあたっているとき、熊本では既に戦端が開かれたという噂が流れ、速やかに戦地に進み薩軍を打ち払い熊本城に籠城の同僚を救うべきだという隊員からの声が高まつた。そこで川畠警部は、限元警部補に戦況視察を下命、限元警部補は、2月22日夜、植木向坂での乃木連隊と薩軍の遭遇戦を目撃した。この戦いで勇戦して傷ついた伍長に感銘を受け、血まみれの同人を抱きかかえて助け、満身鮮血を帯びて佐賀に急行、川畠警部に戦況報告し、警視隊の出戦を要請した。

#### イ 山縣参軍への面会

川畠警部は、これまでの隊員の出戦要望、川村参軍の戦意、上田警部の決意等の報告を受け、出戦の意志を固め、直ちに、南閥本営を訪れ、山縣参軍に警視隊も戦闘に加わる決意である旨を伝えた。

## 4 なぜ、山縣は警視隊の出戦願いを拒否したのか

山縣は、川畠に対し冷たい言葉で、これを拒み、南閥を越えることを許さなかった。拒否理由は次のことが考えられる。

#### (1) 戦闘は陸軍の任務

当時の陸軍内部には「戦闘は陸軍の任務である。警視官の出戦は事の宜しきに非ず」とする空気が非常に強かった。

## (2) 徹兵令に反する

徹兵制の主唱者である山縣にとって、旧士族で構成されている警視隊の力を借りることは時代に逆行することであり不本意であった。

## (3) 兵力の増強

兵の数は開戦当初に比べ日ごとに増強されており、山縣は「今、戦場では軍隊が充満しており、これに警視隊まで投入しなければならない状況にはない」と述べている。

## 5 警視隊幹部は、対山縣対策をどのように行ったのか

### (1) 川路の「三隊合し出戰請うべし」の電報と三警部の協議（3月9日南閑において）

川端は川路大警視からの「山縣參軍に面会し、三隊合同して田原坂の戦闘に参加できるよう願い出よ」の電文を受け、高瀬から上田警部を呼び、到着したばかりの園田警部を交え対山縣対策について協議した。先ず、同郷の川村參軍及び大山少将の助言をいただき、そして山縣參軍との面談を行う。山縣參軍の面談では園田警部に発言させ、警視隊員の熱情と決意を理解してもらい、参戦する場合は、どのような任務を希望するか、拒否の場合は、どう主張するなどを話し合った。

### (2) 川村參軍・大山少将に懇請（3月10日二俣村において）

三警部は、先ず川村參軍に面会し、川路の「田原坂戦闘参加の指令」を説明、川村參軍から「今日山縣參軍に伝える」の旨をとりつけた。その後、大山少将に会い、大山少将からは「この地は兵士が充満しており、不足はない。思うに豊後路は檜垣権少警視が僅か500名で孤軍懸陣し、防御が薄弱なので君らの300名を彼に合し、大津口より薩軍の側面を衝けば当地進撃の声援となり良策であろう。既に三好少将に託して山縣參軍の決定を求めているから暫く待たれたい」とのことであった。三警部は、非常に喜び二等巡査内藤兼才を檜垣警視のもとに大山少将の構想を伝えた。

### (3) 山縣參軍に面謁（3月11日）

三警部は南閑にある總督府本營の山縣參軍を訪ねた。

園田警部：打ち合わせのとおり低姿勢で「我々警視隊は銃を携えて此の地に行くことを命ぜられた。それは田原坂の戦場に赴き戦闘参加が目的である。我々が現在やらされているのは弾薬輸送警備だけではないか。これは陸軍が自身やるべきことである」。

山縣參軍：これを無視するかのように冷たい口調で「諸君たち警視隊の行動については川路大警視から一任されている。従ってどのようなことをさせるかは私の方針次第である。諸君は、わが主を言わず、どんな苦労にも耐えて、私の命令のまま行動する決心であたることが必要ではないか」。

園田警部：山縣の発言にひるむことなく態度を変え「貴方は大警視の依頼を自分の都合のよいように解釈して言っておられるだけだ。大警視は貴方に我々警視隊を田原坂の戦闘に参加させてくださることを依頼したのですぞ。そうされないなら、これから我々がどのような行動をとるかは、警察としての本来の権限内のことであり、貴方に指示されることはありません。貴方が今後も弾薬輸送の任務に当たらせ出戦を拒否されるなら、本日以降、我々は貴方の指揮下か



別動第五旅団長  
陸軍少羽 大山鶴  
當時34歳(鹿児島)



坂刀隊二等中警部  
園田安賀  
當時26歳(鹿児島)

ら離脱し、警察の権限を独自行使することになる」と鋭い言葉で迫った。

山縣參軍：内心で動搖したが、これを押し隠し「戦地での諸君の行動は總督府の命に従ってなさなければならぬ。大警視からも私のところに電信が来ているので、これに回答しておいた。それでも意義を申し立てるとはどうしたことか。私の説明が理解できないのか」と声を荒くして警視隊の出戻を再度拒否した。

#### (4) 大警視の抗議（3月11日）

川畠はすぐ、大阪で指揮をとっている川路に、山縣との面談の内容を報告した。川路は、山縣へ「我が部下が重ねて頗ったにもかかわらず、これを受け入れて下さらなかつたのは、残念極まりない」の電報を送り、川畠警部に「三隊共にひとつにまとまり、田原坂の戦闘に加わることが出来るように川村參軍に依頼しておいた。そちらでもよく頼り出るようにせよ」と川村參軍への依頼文面を添えた。

### 6 山縣は、なぜ一転して警視隊の参戦を許したのか

#### (1) 戦死傷者・弾薬消費の増加と狙撃隊等の壊滅（3月11日）

山縣は三警部と別れた後、急ぎ二俣山本營に赴き、田原坂の戦況を観察する。幹部から死傷者及び弾薬消費の増加、別働狙撃隊・選抜隊のほぼ壊滅の説明を受け、戦況が依然膠着状態にあることを確認した。

#### (2) 政府の衝撃軍計画を察知

山縣は、田原坂攻撃の成果があがらないのを政府が憂慮し、海軍を使って別働旅団を八代へ上陸させ、熊本城包囲を解かせる戦略を立てていることを察知した。山縣は、自分の立場が揺らいでいることを知り、この戦略が実行に移される前に新たな一手を打つ必要があった。

#### (3) 川村參軍の「警視隊による抜刀攻撃」の旨

山縣は10日川村參軍から「警視隊の中から決死の壯士を特選し、斬り込みによる敵砲への突入が最も有効である」旨を開き、現状の打開策として陸軍にない抜刀攻撃に傾く。

#### (4) 保身

政府の動きや大警視からの抗議もあり、内心では保身のため、警視隊の要望を入れることも止むを得ないと考え始めていた。

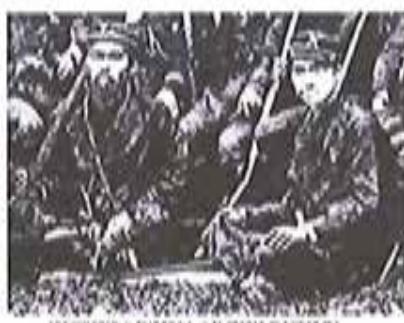
### 7 警視隊は、どのように編制されたのか

#### (1) 山縣參軍、抜刀攻撃を条件に許可（3月12日）

山縣參軍は、高瀬本營に上田警部を招き「田原方面の陸軍は鉄砲で戦う兵力は不足していることはない。しかし、刀を振りかざして攻撃をしかけてくる敵に対応するのに不十分なところがある。警視隊員は旧武士の出身者から編成されているのであるから、刀を武器として参戦してくれたら勝利を手中にできる。警視隊のうちで、刀を使える者を7~80名選抜して、この任務に当たってもらいたいがどうだろう」と申した。上田は「私は、ここで日本刀のみで戦うことを誓う。軍令



參軍 陸軍中將  
山縣有朋  
當時38歳(山口)



陸軍軍刀の切羽付(右の參軍は帶刀を除く)

を頂いたら私は直ちに南閨の川畠警部のもとに向かいたい。山縣もこれを承諾し「拔刀隊」と名付け正式に軍令として上田に伝えた。

#### (2) 警視抜刀隊の選出（3月12日）

上田警部は、人力車で南閨に急行し、川畠警部らに山縣とのやりとりを報告した。川畠は大警視に報告し、了承を受け、ここに警視抜刀隊による攻撃が決定された。作戦計画が隊員に伝わると忽ち参加希望者で溢れた。三警部は協議したうえ、川畠隊40、上田隊40、園田隊20を選び、警部補以上は全員加わることにした。

#### (3) 隊員全員で田原坂擊破を誓う（3月12日）

園田警部は隊員を集め「敵に向かって決死の心で立ち向かう者は、決して人に遅れることはない。敵に突進する時、十間以上遅れた者は、直ちにこれを斬る」と厳命した。また、隈元警部補は、この場で誓約書を作り「ただ今、我々戦友一同は、抜刀隊員となる名誉を頂いた。これにまさる感激はない。必ず奮戦し、敵を擊破することを誓う。命令に背き、戦闘中に戦士として節度に背くことは決してしない。卑怯な振る舞をして同志の者に遅れをとるようなことをしてはならない。もし、この約束に違う者があれば、隊員の手でこれを斬り、隊を清めるこにする」と読み上げ、隊員全てがこれに賛同し、これを守ることを誓った。

#### (4) 出戦の決定

三警部は、直ちに二俣出張本営に赴き、軍議に加わった。警視抜刀隊の出戦は、13日午前4時を期して二俣村より正面進撃することが定まり、南閨を午後8時出発の内村警部率いる警視抜刀隊の来着を待った。出撃時刻が迫る中、歩兵部隊は各集合地に向かって行進をはじめ、抜刀隊が到着すればいつでも進撃できる体勢である。ところが警視抜刀隊は姿を見せず、大山少将は進撃の中止を指令した。警視抜刀隊が到着したのは13日明け方であった。遅れた理由は刀の調達に時間がかかり、警視抜刀隊が高瀬で受領したのは午前3時を過ぎていた。

## 8 二俣口の斬り込みは、どのようになされたか

#### (1) 斬り込み目標視察と陸軍との打ち合わせ（3月13日）

斬り込みは3月14日午前4時に延期となった。三警部は、13日陸軍參謀益満邦介中尉の案内で現場周辺を視察、二俣台の右寄りで、横平山に近いあたりから見える大きな保壘を攻撃目標と決めた。陸軍側もこれに同意した。ここは薩軍の七本指揮所の近くで、敵にとっても重要拠点のひとつであった。



參謀 陸軍中尉  
益満邦介  
当時27歳（鹿児島）

#### (2) 出張本営集合（3月14日）

警視抜刀隊が二俣の出張本営にひそかに集まつたのは14日午前1時ころであった。各人所持していた銃器類をはじめ、金銭、メモ類等の私物に至るまで、すべて出して係の者に保管を依頼し、日本刀を一振りずつ腰に帯びた。本営から贈られた酒樽の蓋を破り祝杯をあげ、二等巡査龍岡信熊（園田隊）らは「今日ははじめて日ごろの志達するのを得たのは、偏にわが上官の尽力による。願わくは幸いに一杯を献酬して決別せん」と全員に呼びかけ川畠警部らを招じて酒盃をかわした。隊員たちは、いずれも、これがこの世で最後の集まりとなることを、すでに心に決めていた。川畠は「斬り込みは進撃喇叭をもって一齊に奮進衝突し、一大胸壁を三面よ

り合撃すべし」と命令した。警視抜刀隊は四つに分かれ闇の中をゆっくりと進んだ。

### (3) 斬り込み

#### ア 側面攻撃隊 11名

最初に第一壘を発見したのは側面攻撃の限元警部補の隊であった。限元は壘のすぐそばに来ていることに気づき、敵がまだこちらに気づいていないことを二等巡査松嶋喜右衛門と確認、時がたつにつれ明るさが増してきた。限元警部補は隊員に「今こそ斬り込みをかけるときだ。俺に続け」と一斉に斬り込みをかけた。不意を突かれた薩軍は対応できず、忽ち7、8名が斬り落された。この壘を守っていた一番大隊七番小隊（小隊長森岡長左衛門）は奇襲攻撃に不覚をとることになった。

#### イ 背面攻撃隊 33名

敵の背面を衝く川畑警部の隊は複雑な地形に迷い、進路をさがしているうちに限元警部補の隊の後方を進んでいた。限元警部補の隊の斬り込みに気づき、直ちにこれに合流して突入した。さしもの薩兵も恐慌なすところを知らず壘を捨てて潰走した。限元ら数名は負傷したが、少しも怯まず、意気軒昂である。ここで川畑は悠々と凱歌を謳い舞いはじめ、隊員一同血刀を地に立てて和したのである。

#### ウ 正面攻撃隊 44名

正面攻撃の上田警部の隊と園田警部の隊は壘の明かりを探して登っていたとき、限元警部補の隊らの喊声を聞き、戦闘が始まったことを知った。上田警部は「今こそ進撃の機会だ」と急ぎ進撃喇叭を命じ、左に在る第二壘を見つけて、すかさず突撃をかけた。警部補小笠原光敬（群馬）、同石川敦吉が先に斬り込み、これに部下が続いた。乱戦の中で、数十名を躓したが、小笠原警部補、三等巡査村山重清（鹿児島）ら4名が戦死、2名が腹を切られ重傷を負った。正面攻撃隊は、第二壘を奪い、同僚や薩兵の屍を越えてなおも進み、第三壘も攻略した。ここで警部補小暮信近（新潟）が躓れ、二等少警部緒方惟典（鹿児島）以下数名が負傷する。さらに追撃にあたり警部補伊知地季利（鹿児島）と二等巡査龍岡信熊は薩兵4名を相手に斬り結び、伊知地は敵刃に躓れ、龍岡も刀剣8か所と銃剣を受けた。上田・園田両警部も薩兵各1名を躓した。

#### エ 遊撃隊 25名

敵の強いところにあたる遊撃隊の田村五郎警部（福島）は、正面攻撃隊の後を進んでいた時、第四壘を発見し、接近した。この壘の薩兵は近くで異変が起きていることに気づき、警戒態勢に入ろうとしているところであった。田村は、これを察知して加藤寛六



抜刀隊二等少警部  
田村五郎  
当時24歳(福島)

郎警部（26歳、福島）と二隊に分け両側から突入、乱撃して10名余を殺し、壘を奪った。

#### （4）追撃

四隊の警視抜刀隊の斬り込みで、敵は植木街道の方へ敗走した。警視抜刀隊は四壘を占領したが、いざれも陸軍約6000人が3月4日以来、連日攻撃をかけ、攻略できなかつた保壘である。日本刀だけを持った113名の警視抜刀隊員が半日にして攻略することができた。警視抜刀隊は、さらに前進し、植木街道に沿つた電信柱の下あたりまで進んだ。ここで、敵も体制を組みなおし、こちらに決死の勢いで斬りかかってきたので混戦状態となつた。警視抜刀隊は、敵を圧倒しながら植木街道に達し、遂に出先の本営に突入し、ここを焼き、大砲2門、小銃200挺を奪取した。

#### （5）薩軍の反撃

薩軍は戦術を変え、銃隊を主力として攻撃を始めた。そこで、すぐに陸軍部隊が警視抜刀隊に代わり銃撃戦が始まった。銃を持たない警視抜刀隊は、ここで弾が飛んで来ないところまで一旦下がることとなつた。日本刀のみでの攻撃に入つて既に3時間は過ぎ去つていた。銃撃戦の闇外に出たといつても休息する余裕などはなかつた。戦死した同僚の收



田原坂の電柱

容、負傷の同僚の手助けして戦場外へ移し、手当をしてやらねばならなかつた。午前10頃、薩軍は銃隊を前面に出し、岩石、木立を盾にして攻撃を強め、陸軍がひるむ姿勢を見せる、直ちに抜刀集団に代わり斬り込みをかける作戦をとつた。戦場の様相は一変し陸軍は後退、これまで占領した壘は再び薩軍が取り返してしまつた。

#### ※ 警部補生田登三郎（熊本）の部下救出

生田警部補は警視抜刀隊に進んで参加した。3月14日の斬り込みでは川畠警部指揮下の背面攻撃隊として薩軍が待ち構える陣地に突入して奮戦した後、陸軍部隊と交代し、部下を点検したところ西牟田彦三巡査がいないことに気づいた。生田はすぐに交戦地域にとつて返し、危険を顧みず探し回つたところ、薩軍のそばに倒れている西牟田巡査を発見した。西牟田は斬り合ひの中で乱戦状態となり、重傷で動けなくなつてゐたのである。生田は背中に西牟田を乗せ、薩軍の陣地の近くを這つて脱出し、味方のところまで運んできた。その生田は翌15日横平山の戦闘で戦死する。（石光真清の手記）

#### （6）小野田元熙警部の報告

##### ア 電報報告

警視隊が冷遇されていることで派遣された二等大警部小野田元熙は「三月十四日、警視隊ハ賊ノ拠点ニ日本刀ヲ斬込此處ヲ占領ス」と簡潔に報告した。警視隊の奮戦の実状を詳細に報告すると、これまで約10日間にわたつて攻撃を続けた薩軍が戦果をあげることができなかつたこと、その理由についてもふれることになる。小野田は、それが外部に知られると、このあとの政府各機関の連携がでることになると、判断して先づ、電報で簡単に報告するだけにとどめ、詳細は別の方法によって報告することにした。



特務二等大警部  
小野田元熙  
当時29歳(眞馬)

#### イ 戦闘模様報告（「鹿児島征討始末」）

明治十年三月十四日午後十一時認ム 警部 小野田元照ヨリ 大警視 川路利良 殿  
官軍の斬り込みは、このたびが初めてです。本日午前2時、百名の警視官を三隊に分け、川畠、園田、上田の3人が夫ヶ長となり、この下に6名の幹部を配備しました。いずれも全身に勇気をみなぎらせ、ただ日本刀だけを持ち、あらかじめ目標にしておりました三ヶ所の巣に向い、まだ薄暗いうちに斬り込みをかけました。隊員は、一人で4名位の敵を斬り落すことができました。この間、我が方にも別紙にありますような死傷者がありました。負傷者はいずれも氣力は充分であります。御安心ください。政府軍は、この三ヶ所の巣を、これまで数日にわたって攻撃し、多くの死傷者を出し、多量の弾薬を使いましたが、攻略することはできませんでした。そこを警視隊はわずか数時間で攻略したのであります。川畠、園田両警部の上衣には弾丸が通ったあとが数箇所あり、激戦であったことが認められます。しかし、二人共に今も氣力充満したままの状態であります。限元實道警部補のごときは、腹部を銃丸が貫通し、さらに胸を撃たれましたが、それで

も戦場を去ろうとはしませんでした。同行していた益満陸軍中尉が強く説得しましたので、ようやく戦列から離れたそうであります。限元は二ヶ所とも、弾丸による傷を受けただけで、相手と斬り合いをした刃傷を受けたあとがひとつもないのは残念だと申したそうであります。

#### ウ 警視局警視官の名声に関する報告

小野田は報告書の最後に「大警視の御名譽は、この壯舉によって限りなくあがりました。これはひとえに、これまでの大警視の指揮とこれに抜刀隊員全員が呼応して奮戦したからにほかなりません。この壯舉により警視局警視官の名声を全国に輝かせることができました。喜びにたえないところであります」と書いています。

#### エ 斬り込み観戦模様報告

小野田は項を改めて警視抜刀隊の斬り込みを多くの人が観戦した模様について「山縣陸軍軍、大山・野津少将は勿論のこと、そのほかの兵士、軍夫に至るまで、本日の警視隊員の奮戦を見て、心をうたれ感激しない者はありませんでした」とある。二俣口一帯の薩軍の陣地を目指して、警視抜刀隊が日本刀を振り上げて突入していく場面を、その下の方に広がる谷地から政府軍側の人たちをはじめとして、抜刀斬込みがあるとのうわさを聞いて、これを見ようと集まった人々は、見上げるような位置から観戦すること



小野田警部が記した二俣口の戦闘（鹿児島征討始末）

#### 3月14日歿死者

|             |              |
|-------------|--------------|
| 警部補 小暮 信近   | (28歳新潟:上田隊)  |
| 警部補 伊知地秀利   | (37歳鹿児島:園田隊) |
| 警部補 小笠原光敷   | (26歳群馬:上田隊)  |
| 二等巡査 畠山 三七  | (28歳鹿児島:上田隊) |
| 二等巡査 西牟田茂三  | (21歳鹿児島:川畠隊) |
| 三等巡査 川畠 橋翁  | (23歳鹿児島:川畠隊) |
| 三等巡査 村山 重清  | (20歳鹿児島:上田隊) |
| 三等巡査 寺澤 重二  | (24歳筑前:川畠隊)  |
| 四等巡査 宮田祐四郎  | (23歳東京:上田隊)  |
| 四等巡査 牧野志津之助 | (25歳埼玉:上田隊)  |

ができた。抜刀隊出動のうわさは、すでに、この日が休養日にあたっている軍人、軍夫から住民にまで知れ渡り、刀で斬り合いになる戦はどんなものか、なんとか見たいと思う者たちで、いつの間にかあふれるほどになった。見物する場所は、まるで舞台で展開される場面を劇場の観客席から見るような角度にあたっていた。警視隊の制服姿で日本刀だけ使って攻め込む姿は、見物する側にとっては、手に汗を握らせるような場面であった。日本刀で斬り合いをする状況を、明治の時代になって初めて見ることができるのである。報告書は最後のところで、この日の戦死傷者 24 名について記入したもの（所属・階級）が添えられている。この報告書は 3 月 19 日、大阪にいる川路大警視、京都の大久保内務卿に届いた。

#### (7) 新聞報道

##### ア 東京日日新聞

東京日日新聞記者福地源一郎は、「戦機の熟する頃、巡査の抜刀隊は、3、40名ずつにて砲煙の間より斬ってかかる。賊もこの手段に不意をくらひ、遂にその壘を乗っ取られたり。この勢いにてソレ進めソレ乗っ取れと勇み立ち、一時に数轍を抜き、田原坂の上なる植木街道側の電信柱の下まで近づきたり。されど敵は必死を極めたる暴徒なれば、再び盛り返され、わが方も追いしりぞけられたるが、足を踏みとめ、遂に敵を追って、はじめに接近した電信柱の下の方まで近づきけり。されど敵は必死で立ち向かい、ひとつ壘の中に 12 名いたうち、11 名がここで枕を並べて討死し、逃げたのは一人だけのみなり。味方は益々勢いに乗じて敵に迫る。その働きは味方の死体を飛び越え飛び越えて進み、死を顧みざるは實に目覚ましき振る舞いといふべし。なみの敵なれば、この勢いにては、忽ち破竹の如くに進まるべけれども、敵が敵ゆえ、思うように行かず、そこを攻め続けた味方の死傷者も多し。しかし、敵の死傷者は味方より多かったであろうと思われる」と報じる。

※ 福地は山縣參軍に信頼されて戦闘様子を間近で取材、警視抜刀隊の記事は 3 月 24 日掲載

##### イ 郵便報知新聞「戦地直報」

郵便報知新聞の記者犬養毅は「政府軍は進撃して賊の壘に迫り、今にもここを占領しようとした。このとき 13 人の敵兵があくまでも守り続け、退却しようとした。この時、かつて会津藩士で、今警視隊員となっていた某が、ただ一人で斬りこみ、13 人を斬り倒した。この警視隊員は「戊辰の復讐、戊辰の復讐」と叫びながら斬り倒していく。これは小説家が言つたことのように思われるかもしれないが、決して作り話ではなく、本当にあったことだ。この警視官は、この斬り合いの時、重傷ではなかったが負傷したことである」と十年前の会津戦争と関連があることを報じている。

※ 犬養の自伝では、戦地立入り許可は 3 月 21 日で、報道は実地に目撃したものではない。



新聞記者  
福地源一郎  
当時 35 歳(長崎)



新聞記者  
犬養毅  
当時 21 歳(岡山)

## 9 横平山は、どう攻略したのか

#### (1) 田原坂へ向け進撃

3 月 15 日午前 3 時、山縣參軍は、園田警部を本営出張所に呼び、「警視抜刀隊は吉田時道大尉（第十連隊第二大隊長心得）の援隊に合し機に投じて田原坂に斬込むべし」と命じた。園田

は川端・上田両警部に告げ、両警部も一緒に行こうとしたが岡田は「昨日の戦で多くの死傷者を出し、現に戦いに従事できる者は僅30名に過ぎず、3名の指揮長は必要としない」と両警部をとどめ、30名を率いて出発した。

## (2) 横平山攻撃に寄り切

田原坂の手前で本營の伝令が駆けつけ「野津大佐命令、今、横平山が薩軍に奪われた。よって警視抜刀隊は予定を変更し、直ちに之に当たるべし」と伝えてきた。薩軍側は警視抜刀隊の再斬り込みを予測、先手を打って 15 日未明、横平山を奇襲占領したのである。

### (3) 第一次警棍拔刀隊攏平山突入

薩軍は横平山山麓まで占領しており、園田は隊員に大声で喊声をあげさせ、正面からの斬込みを命じた。隊員は白刃を振りかざし一齊に呐喊山麓の薩軍を打ち払ったが、それから先は、山頂から雨のように弾丸を撃ち込まれ容易に進めない。園田は「壯士が節を立てるのは、この時である。躊躇するながれ」と叱咤し、田村五郎警部に 15 名をつけ右より進ませ、自ら 15 名を督して左より進み、陸軍も並行前進した。川畑警部、内村直義警部等も若干の巡査を率いて来援し、共に山腹にこもる薩軍に向かって突撃、午後 1 時、中腹の三塙を奪取した。

先頭を進んでいた園田警部は右胸に  
撃たれ後送、内村警部は左に刀を握り、  
右手で部下を誘導しながら進み、薩摩  
に接近した時、額を正面から狙い撃ち  
されて即死した。川畑警部らは薩軍の  
猛烈な銃火を躊躇せられながらも一歩も進めなかった。

#### (1) 資銀黨に反対提出議會會

上田警部は、永谷警部の来着を待っていた。そこへ本営出張所から「横平山危急なり田原坂方面配置の数名を引き上げ、至急、短兵薩摩をきれ」と命じてきた。上田は昨日の激戦で死傷し、田原配置の数名も福岡・佐賀より昼夜兼行して直ちに戦闘に従事していて疲労は特に甚だしい。あえて請う、南関の五十名が来着するのを待って命を奉ずる」と申したてその命に応じなかつた。しばらくして、また命令があり「事急なり、五十名を待つ暇なし、もし命に服しないなら近衛兵をもって銃剣突貫させるであろう」というものであつた。結局、近衛兵も投入して攻撃に及んだが、やはり山頂を奪うことはできなかつた。

#### (b) 第二次警視抜刀隊の倒着



午後2時、本営から上田に「南間に危急を報じ五十名を急がせよ」の命が下ったその時、永谷警部が50名の警視隊を引率し到着した。野津少将は、待っていたかのように、到着の新たな警視抜刀隊に対し「敵は、我が軍が守っていた斜面の陣地を占領した。どうしてもここを奪取しなければならない。抜刀隊がここを攻撃してくれたら、我が軍は、敵を殲滅することができる。銃撃戦で双方が攻撃するだけであれば、それは我が軍だけで出来る事だ。今からやろうとしている作戦は、警視隊と共同して同時にやろうとしているのではない。警視隊のみで敢行してもらいたいのだ」と陸軍側の希望を伝えた。命が下ると我が意を得た隊員は躍り上がり喜んだ。

#### (6) 横平山の地形と薩摩の偵察

益満中尉が案内し、第二次警視抜刀隊は、横平山麓に整列した。時に山縣參軍、大山・野津両將士は軍中にあって警視抜刀隊に注目し、記者福地源一郎も観戦していた。上田、永谷両警部は什長1名を連れ薩摩のそばまで匍匐して近づき、地形を頭に入れさせたうえ、攻めあがって行く道筋を細かく指示し、さらに上田は「人が何か輝かしい評価を世間から頂くのは、困難なことを成し遂げた結果としてそうなるのである。諸君は、ここで全力を捧げ、将来、諸君の名を永く残して貰えるように振舞え、卑怯者だと言われる様なことをやってはならない。敵の敵を我が物にすらできなかつたら、その前で奮戦し、屍は山にさらせ。この命令に従わぬ者は、直ちに斬る」と戒め、隊員はいよいよ奮闘いたった。

#### (7) 横平山の占領

上田、永谷両警部の指揮のもと二隊に分かれ匍匐して横平山をよじ登つていった。山頂の薩摩をめがけた援護射撃も隊員が薩摩下に肉迫したとき、喇叭が響いて味方の銃撃がやんだ。機を見た上田警部は、突撃喇叭を吹かせ、これを合図に山頂に駆け登り、薩摩に斬り込み数十人を斬り倒した。山腹で機会を狙つていた先着の警視隊や旅団兵も喊声をあげ、続いて突入し敵を斬した。午後4時、遂に横平山を制圧することができた。第二次警視抜刀隊の突撃から薩摩敗走までの時間は僅か5分であった。警視抜刀隊は二俣の出張本営に帰還したが、路上でこれを迎える將兵は、道を譲り、慰労の言葉、賞賛の声が相次いだ。本営出張所では酒を贈つて一同をねぎらつた。この日の戦闘で警視抜刀隊の戦死者12名、負傷者36名であった。

#### (8) 大警視の感状と第二次植木口警視隊の派遣

15日の戦闘状況を知った川路は、自ら感謝状をしたため、秘書の大山綱昌警部に持たせ現地に急行させた。「田原坂の攻撃が始まつて既に数日間が過ぎたが、まだ目的を達するこ



第一旅団長陸軍少  
尉野津鉄雄(当時41  
歳(鹿児島))

#### 3月15日戦死者

|                          |
|--------------------------|
| 二中警部 内村 直義 (33歳福島:川井隊)   |
| 警部補 生田 登三郎 (27歳熊本:川井隊)   |
| 二等巡査 伊藤 岩松 (27歳茨城:團田隊)   |
| 二等巡査 相良 荘輔 (25歳鹿児島:川井隊)  |
| 二等巡査 松島喜右衛門 (20歳鹿児島:川井隊) |
| 三等巡査 伊藤 優之進 (27歳宮城:團田隊)  |
| 三等巡査 田中 緑之助 (17歳東京:團田隊)  |
| 三等巡査 三牧 道廣 (27歳静岡:上田隊)   |
| 三等巡査 齋藤 重徳 (25歳山形:團田隊)   |
| 三等巡査 青柳 古壽 (23歳新潟:上田隊)   |
| 四等巡査 村上 祐興 (27歳東京:上田隊)   |
| 四等巡査 關口 寿久 (22歳千葉:上田隊)   |



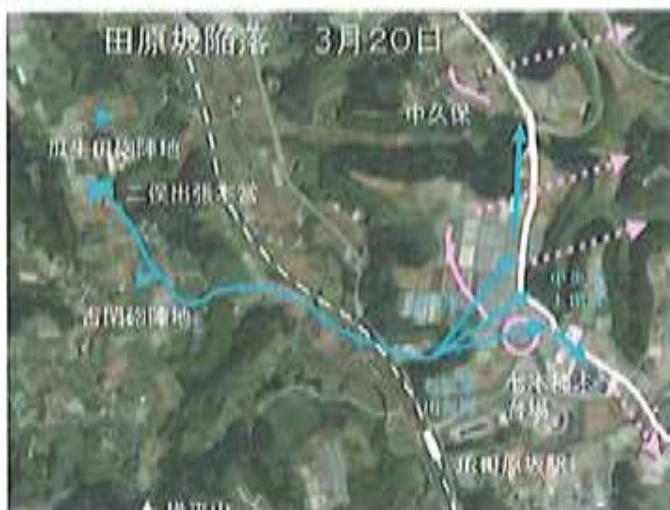
少警視 田邊良輔  
当時32歳(福井)  
特使二等中警部  
大山綱昌  
当時29歳(鹿児島)

とができないでいる。このような情勢の中にあって、諸君は僅か約100人からなる集団にあるにも拘らず、奮進決戦、一撃で敵の陣地を突破し、ここを占拠した。眞の勇士は、このように、戦場に敗れたあとも、その精神は、いつまでも尊敬されるのだ。これはすべての諸君の忠誠と勇気によるところである。この私は感慨無量なるものがある。ここに、私は部下の大山綱昌を激戦の地まで派遣することにした。これは、戦死した諸君の魂を弔い、戦場で傷を受けた諸君の痛みに言葉をかけてやり、現地で苦労しながら任務についている部下にお礼の念を伝えるためである。また、川路は植木口警視隊が小兵力に分散して抜刀攻撃を反復していくには無理を重ね、いくばくもなく全滅するであろうことを危惧し、警視統括下の運用を図るため、少警視田辺良顯の警視隊を増派している。

## 10 田原坂陥落は、どのように行われたか

19日夜から降り続いた雨は20日未明には強風を伴い横殴りに吹き付けていた。一日の休養で銳氣に満ちた政府軍は20日午前5時、強い風雨の中を二俣口から順次進発した。木葉川を渡り、舟底谷のぬかるみを進み、田原坂南斜面の草むらにたどり着いた。ずぶぬれとなりながらも旺盛な士氣で突撃の合図を待っていた。全部隊は配置完了し、夜が明けはじめた午前6時、三発の号砲が鳴り響いた。

右翼・中央・左翼の政府軍は一齊に喊声をあげ薩軍保里を目指して突撃した。川畑隊は右翼軍に属し、柿木台場の保里に突進し、上田隊は中央軍に属し山頂の田原村を目指した。薩軍の抜刀反撃を封するため警視抜刀隊は右手に刀を振りかざし、散開した諸隊の間を進撃し、旅団兵も銃に着剣して進んだ。薩軍は夜來の大雨と連戦の疲労で警戒を怠っていたようである。川畑隊の右翼軍が柿木台場の保里に突入すると、寝込んでいた薩軍は仰天して抵抗もできず、銃器弾薬を放棄して潰走した。これを追撃して田原坂本道を占拠し、周辺の薩軍を片っ端から掃討した。田原坂の右翼を突破されたことで中央や左翼の薩軍は退路を断たれ、戦意を失って田原坂の北斜面を雪崩を打つて逃散し、味取、植木、向坂の線に退いてようやく踏みとどまった。



七本柿木台場

## 11 その他

### (1) 技刀隊の詩

政府軍は、この難局を打開する目的で、日本刀だけで武装させた旧士族で編成された警視隊員を先頭に進ませ、このあとを陸軍部隊が進み、薩軍に突入させる戦術を考え出した。やがてこの作戦は成功し、戦況は政府軍側に有利になり始めた。この部隊は警視抜刀隊といわれるようになり、忽ち世間でもてはやされることになった。抜刀隊の詩が青年学生の間に愛唱され国内の各地に広がりはじめた。詩は薩軍の強さを褒め、決死の警視抜刀隊を讃えたものである。現在も警視庁機動隊観閲式では抜刀隊歌（分製行進曲）が使用されている。

## (2) 懲罰につとめた田村五郎警部

本名丹羽五郎、会津藩士。明治5年、東京府で平民となり「田村五郎」と名乗って警視庁に入る。明治10年の西南戦争で川畠隊から「警視抜刀隊」として田原坂の激戦に参加し、この戦いで33名が戦死する。五郎は抜刀隊7回忌に際して『彰功帖』を編纂して遺族に配布、神田泉橋警察署長を最後に早期退職し、北海道に丹羽村を開村、大正3年に同村に三十三観音を建立（玉川公園）し生涯にわたって戦死者の慰靈を続けた。



三十三枚者(左十二枚中管部内侧直端、右十二枚遇直末端)

日本書院  
文庫

卷之三

三月十二日 滅寧の命ありて 三等巡査 村山重清 20歳 残年勤  
れさせの 亂の亂の いけします すすも欲らす はが標かな  
辯世の歌 二等中警部 内村直輔 33歳 残年勤 個單山で病死  
大君の鳥の外に なみむべきしづかごろの やのひどし  
いざらば 木の葉搖れの 身をも亦  
散りての孤もは 花とよしめや

三等巡査 村山重清 20歳 残年勤 二便目で病死  
宮園の 街あめに今くす 太夫の 心の糸を 今日き散らさん  
堀垣の歌 三等巡査 水浦義義 24歳 残年勤 痘の不景氣で病死  
敵のうち 稲のあらがも 白水のもつれに似たる 我がほ哉  
出職の切りの歌 三等巡査 関野謙義 33歳 重慶 植の木景島で病死  
西あられ 降来るふも 何がその わか大君の 鳥ぞおもへば  
長崎開港の歌 右 同  
大君の 雷袖となうて 死する者は  
此のせの事を 切進ひけん

皆我力強が他んで 一等大警部 川村徳兵 残年勤  
わがねさす 鶯も空に 鳴さるは 石の剣の えうなるらん  
せに高も 其名もあけし 太刀風は  
牛一頭も ぬにしふける

陸軍大佐 山川治 風助  
田吉海道主 佐藤保 残年勤

引用文献 論文「警視抜刀隊」(武藤 誠)

警視隊報記（後藤正義）

編 著 平成25年12月 増田 隆 編